

私の心のエネルギーは何か

令和8年5月12日

自らの「希望」を見つけることのできる学校であり続けたい

『科学的根拠で子育て』（著者中室牧子 ダイアモンド社2024）で、「将来の収入を上げるために、子どもの頃に何をすべきか？」という章がある。著者は、データに基づきながら、論を展開するが、その1つが興味深い。「アメリカの高校で、課外活動として、スポーツをしていた男子生徒は、スポーツをしていなかった同級生と比べて、高校を卒業して11～13年後の収入が、4.2～14.8%高い」ことが明らかになっているというデータである。こういうデータは、そのまま鵜呑みにはできない。では、なぜ、そうなるのか、理由に意味がある。そこでは、理由1は、スポーツの有無が企業の採用で有利に働いていたデータ、理由2は、忍耐力やリーダーシップが身につけており、これは、「責任感」「社会性」などのいわゆる非認知能力が高いことによるものであると実証されたデータ、理由3は、スポーツをしても勉強はおろそかにならないというデータ、さらには、スポーツの良い効果は女子の方がさらに大きいというデータ。様々なデータによって、スポーツをしていた男子生徒の収入が高いことが裏付けされているのである。

また「偏差値の高い学校に行くと、将来の収入は上がるのか」という検証でも、驚くべきことに、「偏差値の高い大学に行くことが将来の収入を上げるという根拠はない」という結論である。同様に、「偏差値の高い高校への進学が、入学後の学力を高める効果はほとんどない」という結論も出ている。

このようなデータから、「将来しっかり稼ぐ大人を育てる」にはどうしたら良いかという問いに、著者は「非認知能力」スキル（育成可能な力）を根拠に基づき示すのである。主には、忍耐力、リーダーシップ、責任感、社会性など挙げ、これこそ、中長期的に発揮されていくものだという。

富士宮北高校は、「社会に愛される18歳」を育てていく。授業はもちろんだが、課外活動、学校を超えた学校間連携、こういう幅広く（非認知）スキルを磨く場面を求めていく。R8も常に前例踏襲を打破して進みたいと思う。

未来に向け、これからもずっと続いてほしい吹奏楽部の演奏

始業式、入学式など、校長として話をする機会をいただく。私は、壇上で話すのは得意ではないが、壇上で全ての人たちと「会うこと」ができることは、とても嬉しい。なぜなら、私というキャラクターを表現できる場であり、校長に与えられる（特別活動内の）数少ない教育的行為の一つだからである。そして、人間は、本能的に印象で判断する生物であることを踏まえて、私は、そこから生徒との関係性をつくる第一歩を踏み出す。

その壇上で、いつも誇らしく、勇気をくれるのが、吹奏楽部の生徒達の準備を待つただずまい（と演奏）である。吹奏楽部に所属する生徒、教職員は、他の生徒が整列するときに楽器を持ち込み、音程等を確認し、楽器を一旦奏でて、仲間とアイコンタクトしながら演奏準備をしている。国歌、校歌は演奏し慣れているのかもしれないが、それでもミスをすれば、大事な式典を壊すかもしれないという緊張感もあるだろう。指揮者のタクトを見逃すこともできない。式典が始まれば、自分たちの出番まで当たり前のように、椅子に座り、壇上（校長）を見上げ、準備をし、出番が来れば、学校（生徒、教職員等）のために演奏をしてくれる。私が話している間は、演奏はもちろんないが、吹奏楽部の一画があることに、私は感謝をしている。

校歌は、チームで、歌を歌うことに意味を持つと昨年書いたが、演奏してくれる仲間がいることも忘れずにいよう。

学校は、未来のための大切な授業のほかにも未来に届けられる大事なことがたくさんある。そう思う瞬間である。

最後に、校長としても、もっと、一人ひとりに届けられる話をするのが求められると毎回思うが……



未来のために、富士宮北高校の強みを伸ばしたい

令和7年度初めての通信で、「学校の強みの発見」を書き出した。令和8年度もあらためて、「学校の強み」に触れておきたい。

本校は、89年目を迎える。昨年校長として初めて卒業生を送り出したが、3月から4月にかけて、富士宮北高校の生徒は、学校愛が強いと感じ、卒業後も学校に関わる人たち(生徒、教職員、卒業生、地域の方々など)がその気持ちを持ち続けてくれていると感じることが多かった。

再掲(こや通信 NO.1)となるが、アダム・グラントというアメリカの教授は、現代の混沌とした世界で「与える人」こそが成功する時代であると言う。教授は、「give and take」という言葉から、与え、受け取り、関係性をよくするという原理を踏まえ、ギブをする人(与える人)、テイクをする人(受け取る人)、バランスをとる人(いずれもしようとする人)の存在があることに気づき、このそれぞれの人を研究し、「与える人」が、社会では、成功している傾向が強いと発見した。そして、「与える人」は、「向社会性」という、人のために何かしたいと願う気持ちが強い(育っている)状態になることが、この与える人の特徴であると発表をした。

私は、富士宮北高校の生徒は、「学校のために何かしたい。」「学校のために活躍したい。」「家族のために頑張りたい。」「富士宮のために何かしたい。」という願う気持ちが強いと感じる。つまり、本校は、教育活動をしていく上で、とても向社会性の素質の高い生徒たちが集まっているのではないかと感じるのである。

富士宮北高校では、教職員は、生徒に対して、色々なアプローチで、一人ひとりの持っているものを伸ばし、育みたいと願いながら教育活動を行っている。教科・科目の授業は、もちろんであるが、特別活動(学校行事、修学旅行、式典など)、総合的な探究の時間、部活動、学校内での様々なコミュニケーション、全てを使って、一人ひとりに向き合う。この向社会性の強い生徒たちと教職員が集っているのが、本校の強みであると思う。

新たな進学(学習)体制の構築に向けて

「未来が見つかる」学校であるために、富士宮北高では、令和8年度から、個々の進路希望(キャリアデザイン)に寄り添うため、新たな進学(学習)体制の構築を始めたい。次の図をご覧ください。世界のデジタル環境の変化は、非常に速い。学校から外に

一歩でると、学び方は、これまでとは、異なる学びの場が提供されていることに気がつくだろう。

本校は、これらの学習の場を高校生にどんどん提供しつつ、それらと連携しながら、一人一人に合った学び方を模索させたい。

第1弾は、塾のコンテンツ(今回は、Z

会等の通信添削)を利用し、個別に自由進度で、弱点補強に取り組みながら、それを教員がサポートする(質問をうけたり、疑問に答えたりする)体制を作る。

(★塾と連携し、教員がメンター役)

準備しながら、やれることからどんどん取り組めるよう情報提供をしていく。ぜひ、自らの学び方を選びとって欲しいと考えている。(進学体制図)



R7 静岡の教育リーダー連携フォーラム『DXで「学校の仕組み」はどう変わっていくか』石川県副知事浅野大介氏資料から抜粋

